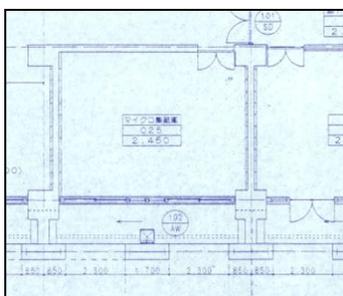


附 5. 東京大学経済学部図書館マイクロ収蔵庫

平成 17 年より、経済学部図書館では所蔵マイクロフィルムのほぼ全てを地下のマイクロ収蔵庫で保管している¹。以前は教室であった空間で、当初の条件は決して理想的なものではなかったが、改修や機器の導入により現在は一定の環境を保持できている。

(1) 大環境：収蔵庫

マイクロ収蔵庫は地下 1 階に位置し、約 7m×6m×2.45m（高さ）の空間に出入口一ヶ所と、地下ではあるが建物周囲にドライエリアがあるため窓がある。これら空気の流入口には気密性の高い AT ゴムを使用した扉を取り付け、窓はアルミパネルで埋めることによって室内の環境を安定させている。



収蔵庫内は感覚的に決して広くはなく、スペースに無駄の少ない電動書架にフィルム資料を収納しているが、全体的にかなりの圧迫感があることは否めない。

室内の温湿度は、中低温用エアコンと乾式除湿機によって管理され、更に空気は質的にもフレッシュオドコップ²の導入により清浄されている。温湿度は日々点検・記録され、設定の温度 15℃、相対湿度 30%を大きく逸脱することのないよう確認している。季節によっては外気との温度差が大きいため、庫内での作業には時として分厚いコートが必要となる。



←室内は通常は消灯されている。正面にフレッシュオドコップ、左手に自動書架。画面右側に見える黒板が教室であった名残である。

¹ 一部は内容の性質上、文書室という別室で保管している。

² フレッシュオドコップ。揮発性有機化合物やカビ、細菌類を捕集除去する。

<http://www.shinwatec.co.jp/file/products_file/20080703160025/freshodocop.pdf> [参照 2009-02-04]

(2) 小環境：舟と箱

ロールフィルムは開架式書架に収められている。個々のマイクロフィルムは中性紙の箱に入れられ、フィルムの幅に応じて5～8箱毎に一つの舟と呼ばれる、蓋のない紙箱に入っている。箱、舟、ロールの帯には原則として中性紙を使い、少なくとも包材が劣化を促進させることはないようにしている。



(3) 保存環境の今後に向けて

現在、マイクロ収蔵庫は庫内に入っても酸っぱい臭いはしない。調査の結果から劣化フィルムが存在することは判明しており、個々のフィルムを手にとると異臭がする場合もあるが、全体としての環境は悪くないのではないかと自負している。このことはパッシブインジケータを使った調査によっても裏付けられている。

マイクロフィルムの保管には手間と維持費がかかる。包材・光熱費はもとより、日々の温湿度点検、包材交換など人件費も過小評価できない。今後は劣化の性質に応じて別の手当が必要となる可能性もある。理想としては、複数の図書館共同で保管する場所と予算を確保し、フィルムを集約した方がより効率的であると考えられる。実際には利用の便や管轄の問題から実現は困難であろうが、少なくともノウハウの共有というレベルでは一考に値するのではないだろうか。

(内田麻里奈)